

江 城 子

乙卯正月二十日 夜記夢

熙寧八年（一〇七五）四十歳、正月二十日密州の任に在って 十年まえに亡くなった夫人王氏を夢に見て作る。悼亡の作。

1 十年生死兩茫茫 ○ 十年 生死 兩ながら 茫茫たり

2 不思量 ○ 自難忘 思ひ量らざれど 自ら忘れ難し

3 千里孤墳 千里の孤墳

4 無處話淒涼 ○ 淒涼を話するに処なし

5 縱使相逢應不識 縱使ひ相逢うとも 応に識らざるべし

6 塵满面 鬢如霜 ○ 塵は面に満ち 鬢は霜の如し

7 夜來幽夢忽還鄉 ○ 夜來の幽夢に忽ちに郷に還りぬ

8 小軒窗 ○ 正梳妝 ○ 小軒の窓 正に梳妝せり

9 相顧無言 相顧みて言無く

10 惟有淚千行 ○ 惟だ涙の千行なる有るのみ

11 料得年年斷腸處 料り得たり年々腸の断ゆる処

12 明月夜 短松岡 ○ 明月の夜 短松の岡

【語意】○江城子：詞の曲調をあらわす。詞牌の名。各七三三四五七三三の八句で、五平韻。押韻している字に○を付けた。○乙卯：熙寧八年の干支は乙卯○十年：王氏が亡くなった治平二年（一〇六五）はこの乙卯年の（一〇七五）からちょうど十年まえ。○兩茫茫：兩とは生者の世界と死者の世界とふたつながら。茫茫ははてしなく広がるさま。○千里孤墳：故郷の蜀（四川省）を遠く離れた密州（山東省）の任地にいるので、亡妻の墳墓は孤、ひとりぼっちになっている。○無処話淒涼：孤墳の中の人、亡妻の立場でいうと解した。話淒涼は、無処といったその処について追述するもの。○縱使：縦も使もたとい。○応不議：応は当とほぼ同じ。それが当然であるという認定。識（しる）は知（しる）に比べて、区別して認識すること。○梳妝：梳はくしけずる。妝は粧、化粧する。○相顧：相はその動作が相手あって行なわれることを意識して添えられる。○料得：料は将来について予想すること。得は動詞の働きを助ける口語的な用法、否定は料不得となる。

【解釈】

この世とあの世とに遠く別れて、はや十年。思うまいとて忘れられるものではない。千里のかなたにおきざりにされたおくつき、さぞや淋しいところを語るすべもなくしていることだろう。いまもし、わたしに出逢ったとしても、とてもわたしと気づいてはくれまい。それほどに、顔は砂塵にまみれ、鬢は霜のようになっていく。

昨夜みたさだかならぬ夢：。わたしはいつのまにか故郷へ帰っていた。こぢんまりした家の窓べによって、あなたはちようにど櫛けずり化粧しているところだった。わたしの顔を見つめて無言、はらはらとはふり落つる涙のいくすじなりしか。まだまだこのさき、いく年もいく年も、短い松の生えたおくつきが、明るい月の光を浴びて、ひとときわくつきりと浮かび出ている光景を、腸もちぎれんおもいで、心にえがきつつけることだろう。